



厳しい砂丘を生き抜く 希少な**海浜植物**が開花します



ハマウツボ 平成 20 年 6 月 4 日撮影

国営ひたち海浜公園の砂丘エリアを歩いていると、白銀のカワラヨモギに寄り添うようにひっそりと生えている草丈 20cm程度の紫色の花を目にすることが出来ます。これはハマウツボという植物で、葉は鱗状で葉緑素がなく、カワラヨモギの根に寄生しています。

初夏の砂丘では、海浜植物が開花のシーズンを迎えます。

本公園では、かつての海浜の自然植生が良好な状態で保たれていたため、多くの海浜植物が見られます。強い潮風を受け、砂は不安定に移動し、夏の炎天下には高熱になるこの過酷な環境をなぜ、植物たちは選んだのでしょうか？一見、地味に見える海浜植物ですが、その砂丘を健気に生き抜く様は大変ドラマティックです。是非、この機会に植物たちの生き様をご覧ください。

お問い合わせ先

〒312-0012 茨城県ひたちなか市馬渡字大沼 605-4

ひたち公園管理センター企画課 穂積^{にあくつ}・小堆・鈴木
電話 (029) 265-9005 FAX (029) 265-9339

※お客様問い合わせ電話番号 (029) 265-9001

ホームページ <http://www.hitachikaihin.go.jp>

ハナハタザオ アブラナ科越年草

草丈は15～50cmになり、細く線状で両面が無毛の葉が特徴的。6～8月で白～紫紅色の花を咲かせる。根は白く、主根は地中に直下する。東北地方南部から中部地方までに分布し、全国的に個体数が著しく減少している。



■トピックス

日本で2箇所しかない！？

～阿字ヶ浦・東海砂丘は主な自生群生地のひとつ～

アブラナ科特有の4枚の花弁のナノハナに似た親しみやすい花ですが、実はハナハタザオは絶滅危惧IB類(EN)^{※1}に指定されており、群生するのは、日本では富士山山麓の砂礫地帯と東海から阿字ヶ浦まで続くこの砂丘のみだそうです。どうして、このエリアだけに残ったのか、詳しいことは分かりませんが、この地域特有の砂丘という土壌が適したのと、開発の手が入った土地を極端に嫌うのではないかとということ、外来種などを含めた他の植物との競争力が弱いことなどが理由にあげられています。

ひたち海浜公園の砂丘エリアでは何気なく目にすることが出来る花ですが、実は非常に珍しい花なのです。

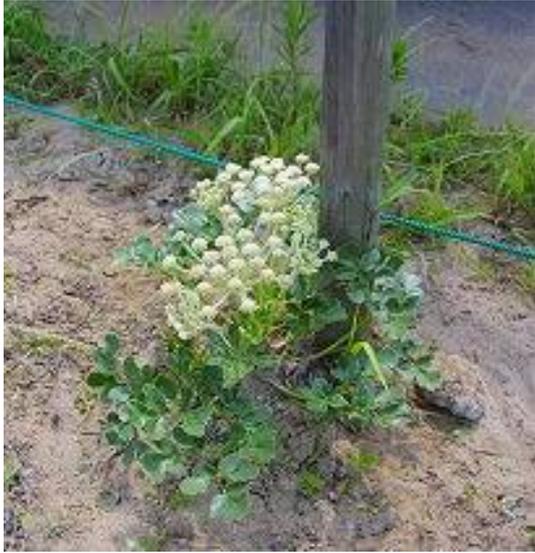


※1 絶滅危惧IB類(EN) : 近い将来における絶滅の危険性が高い種

※2 絶滅危惧II類(VU) : 絶滅の危険が増大している種

ハマボウフウ

草丈は 30cm程度で、6~7月にセリ科特有の白い集合花を咲かせる。肉厚で艶のある葉とのバランスが美しい。東アジアの海岸に分布し、日本各地の海岸の砂浜にも自生する。地上部に比べ地中には驚くほど深い直根を伸ばしている。



■トピックス

乱獲？郷土を代表する食材の危機

ハマボウフウは刺身のつまとして添えられたり、その特有の香りを楽しむために茎葉を甘酢やサラダとして使ったり、根は咳止めとして利用したりしてきました。昔は野生のものを摘み取って利用してきましたが、全国各地で乱獲され、危機に瀕しています。現在、料理店で目にするものは栽培品ですが、海浜公園ではわずかですが自生していますので、何とか大切に守ってきたいものです。

ハマウツボ

ハマウツボ科寄生植物



ヨモギ類に寄生する植物で、5~7月に花茎を伸ばし、紫色の花を着ける。草丈、20cm前後。葉は葉緑素をもたず、褐色の鱗状である。絶滅危惧Ⅱ類(VU)^{*2}に分類される。

ハマカキラン

ラン科多年草



かつては砂丘背後のクロマツの林内で多く見られたが、現在では絶滅危惧Ⅱ類(VU)^{*2}に分類される。環境の変化により消失してしまう。花期は7~8月。草丈、30~70cm前後。

ハマヒルガオ

ヒルガオ科多年草

地下茎は数m、つる状の茎は数十メートルに及び、砂丘を這って増えていく。5~7月にかけてピンク色の花を咲かせる。ヒルガオと同じ仲間だが、乾燥の激しい環境で水分の無駄な蒸散を防ぎ、海水の飛沫から身を守るために葉の表層が厚くなり、光沢がある海浜植物特有の葉となっている。



■トピックス

かつては、浜はピンクに染まっていた・・・

ハマヒルガオは砂丘の砂の移動が激しい不安定帯を代表する海浜植物です。かつては、浜はピンクに染まるほど群生していました。

ところが近年、さまざまな人為的な影響によって、海浜植物の成長に不可欠な砂の供給と移動が少なくなり、また帰化植物が侵入して、海浜植物の生育を脅かしています。

砂丘は生きている・・・

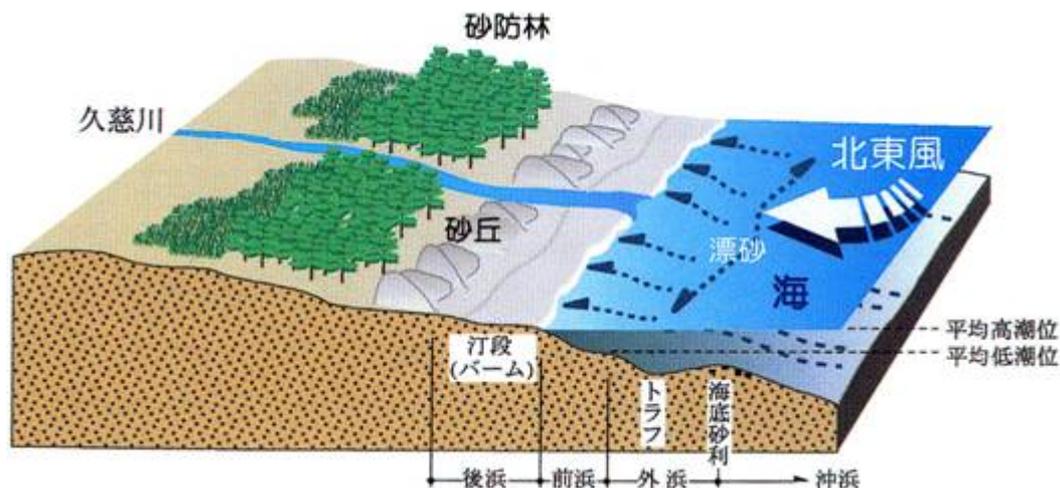
阿字ヶ浦から東海まで続くこの地域の砂丘は、総面積約 1182ha、標高 10m～50m まで、起伏に富んだ地形をしております。また、広がり幅は 3km にも達しており、このように幅の厚い広大な砂丘が自然の状態に残る場所は、全国にも非常に少なく、鳥取砂丘（約 545ha）と比べても 2 倍を超えることはあまり知られていません。



川と海と風による砂の移動の果てに

この地域の砂丘は、久慈川を流れ、一度、海に流出した砂が激しい風によって堆積し、長い年月をかけて砂丘が成長していきました。この砂丘が形成されたのは約 1 万年前だと考えられています。

現在では、さまざまな人為的な影響によって、砂の供給と移動が少なくなっています。



守られてきた豊かな砂丘の営み

ひたち海浜公園のあるこの場所は、かつて日本軍の軍事施設だったのを戦後、水戸対地射爆撃場として米軍に接收されてきました。この間、人間の生活から隔絶されたことにより、この地域には自然の豊かな営みが繰り広げられました。



水戸飛行場だった頃の様子



ハマヒルガオに覆われたかつての浜の様子

生きている砂丘

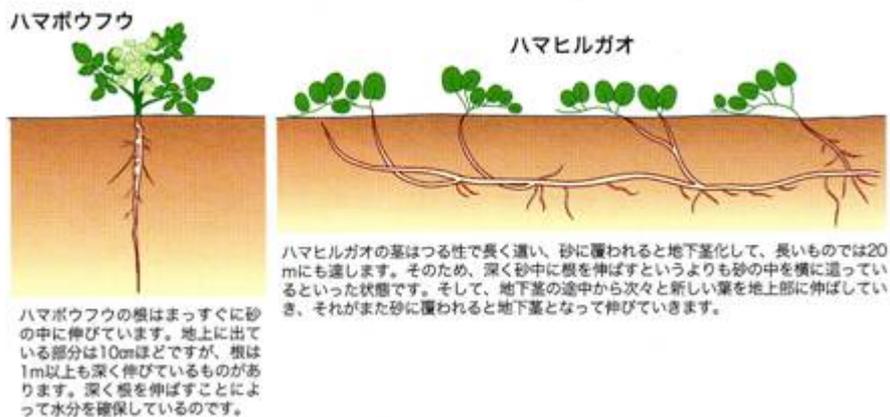
「千々乱風」伝説をご存知でしょうか？江戸時代、この地域で75日も続いた大嵐で3つの村が倒壊、埋没してしまっただけでなく、砂丘では堆積した砂は常に移動し、同じ姿にとどまることはありません。その砂の動きこそが、様々な海浜植物を育ててきました。海浜植物たちは砂の動きが激しく海水の飛沫を受けるところから、そうでないところまで、住み分けを行っています。つまり、砂丘特有のダイナミックな環境の変化が海浜植物の豊かな植生を支えてきたと言えます。

厳しい環境で生き抜く海浜植物たちの知恵

強い潮風を受け、砂は不安定に移動し、夏の炎天下には高熱になる、この過酷な環境をなぜ、植物たちは選んだのでしょうか？

一般にこうした環境を選んだ植物は、他の植物との競争を避けるために、過酷な環境に適応することで生育場所を確保してきたと言われています。

冒頭で紹介した「ハマウツボ」は砂丘に自生するカワラヨモギに寄生する道を選びました。そして、「ハマボウフウ」のように直根を深く伸ばすことで水分を確保する植物もいます。また、「ハマヒルガオ」のように地下茎が砂に覆われると新しい葉を地上に伸ばして、長く長く這っていくものもいるのです。



トピックス

海浜植物観察は、ひたち海浜公園 砂丘ガーデンで

砂丘ガーデンは、出来るだけ砂丘の地形と植生を活かして、潮風を感じながら海浜植物を分かりやすく観察できるようにしたエリアや、グリーン工房という施設があります。同工房には生物の専門の先生がいます（水・土・日・祝のみ）。

海浜植物に興味をもたれた方は、是非、砂丘ガーデンを歩いた後は、グリーン工房にお寄りください。



茨城生物の会 会長 小菅 次男先生

～公園歳時記～

キジの決闘!!

～初夏は鳥たちの繁殖のシーズン～



国営ひたち海浜公園は砂丘エリアで収めた**キジの雄同士のテリトリー争い**の写真をご紹介します。

キジは一定のテリトリーを守って生活をしているようで、公園内を散策していると「ケンケン」と甲高く響く鳴き声を耳にしたり、ぼったり出くわした方も多いことでしょう。

目の周りに赤い肉垂れがあり、金属光沢のある暗緑色の羽色のものが雄です。それに対して雌は雄に比べて非常に地味で、褐色で黒色の斑紋があり、小柄です。

初夏は鳥たちにとって繁殖のシーズンです。もし、このようなドラマを目撃した際には鳥たちを刺激しないようにしてあげてください。



※なお、記事掲載などで、写真をご希望の方は表のお問合せ先までご連絡ください。